

草書發展上における王羲之書法の位置づけ

―「長沙東牌樓東漢簡牘」

「樓蘭出土殘紙・木牘」「十七帖」を中心として―

芹澤 麻美 子

王羲之の時代は章草から今草の過渡期に位置するが、一般には王羲之の草書は完成した草書体(すなわち今草)として扱われている。今日、真蹟は存在しないものの双鉤填墨などによって残された書蹟は、書を学ぶ上で欠かせない重要なものである。今回の研究では、比較的真相を伝えていると考えられている「十七帖」の草書をもとに、王羲之の草書はどのような経緯を辿り、今日に伝えられる様子になっているのかを探り、改めて草書發展史における王羲之草書の位置を検討したい。そのために王羲之に先行する草書と対比する方法をとることにし、比較対象の草書は信頼できる考古学的発掘資料とする。具体的には「長沙東牌樓東漢簡牘」と「樓蘭出土殘紙・木牘」である。その理由は、両資料に王羲之の草書と類似している字を検出できることと、「樓蘭出土殘紙・木牘」は王羲之以前のものであれば同時期のものもある。また時代を少し上り、後漢時代の「長沙東牌樓東漢簡牘」も重要な資料であると判断したため、この二者を「十七帖」との比較対象とした。

目次は左の通りである。

【目次】

序論

研究動機

研究方法

先行研究

本論

第一章 王羲之について

第一節 王羲之の書について

第二節 王羲之「十七帖」について

第一項 王羲之「十七帖」の概論

第二項 王羲之「十七帖」(吳継士本)について

第二章 「長沙東牌樓東漢簡牘」について

第一節 後漢末の状況

第二節 「長沙東牌樓東漢簡牘」の概説

第三節 「長沙東牌樓東漢簡牘」中にみられる草書について

第三章 「樓蘭出土殘紙・木牘」について

第一節 「樓蘭出土殘紙・木牘」の概説

第二節 「樓蘭出土殘紙・木牘」中にみられる草書について

第四章 「十七帖」、「長沙東牌樓東漢簡牘」、「樓蘭出土殘紙・木牘」の書法的特徴

第一節 「十七帖」の書法的特徴

第二節 「長沙東牌樓東漢簡牘」の書法的特徴

第三節 「樓蘭出土殘紙・木牘」の書法的特徴

第五章 「十七帖」と「長沙東牌樓東漢簡牘」、「樓蘭出土殘紙・木牘」の字形比較

第一節 「十七帖」と「長沙東牌樓東漢簡牘」における字形上の関連性

第二節 「十七帖」と「樓蘭出土殘紙・木牘」における字形上の関連性

第六章 「十七帖」、「長沙東牌樓東漢簡牘」、「樓蘭出土殘紙・木牘」の三者を巡る字形考察

第一節 「十七帖」、「長沙東牌樓東漢簡牘」、「樓蘭出土殘紙・木牘」類

第二節 「十七帖」と「長沙東牌樓東漢簡牘」、「樓蘭出土殘紙・木牘」の

異とその要因

似点

第二節 「十七帖」、「長沙東牌樓東漢簡牘」、「樓蘭出土殘紙・木牘」差

異とその要因

結論

第六章では、「十七帖」、「東牌樓簡牘」、「樓蘭文書」三者における字形考察をおこなった。第一節では三者の類似点、第二節では三者の字形の差異とその要因とし、考察を行った。三者の類似する字形の特徴として、左のことを検出した。

・ 横画の角度

・ 右旋回のリズム

三者とも類似する結構のものが見受けられる。右旋回で書かれる字は、横画の角度も右上がりであり書かれていた。

次に、三者の字形の差異とその要因である。この点に関しては三つあげた。

A. 画の角度・方向

B. 画を「点」で書く字

C. 筆勢の相違

A (画の角度・方向) は類似点でも挙げたが、相違する特徴でもあった。やはり「十七帖」の画の角度は殆どが右上がりに統一されて書かれているが、「東牌樓簡牘」、「樓蘭文書」はまだ画の角度が安定していない。特にそれが顕著にみえた結構の文字は「東牌樓簡牘」であった。

B (画を「点」で書く字) は、「十七帖」は画を連続し、省略して書かれる字が多く見受けられた。「東牌樓簡牘」、「樓蘭文書」は、画を短い「点」で書くものが多くみられる。しかし、王羲之以降の草書を見ると、全ての文字ではないが、「点」で画をあらわす文字がある。

C (筆勢の相違) はここで大きな相違点として「横画と交差する画の規則性」を挙げた。「十七帖」は横画から縦画という筆順で書かれ更にその二つの線が交差する際、連続・あるいは次の縦画へむけた筆脈がみえる。一六八字中、八九字が該当する。「東牌樓簡牘」、「樓蘭文書」は横画末から次の縦画へと連続する脈略がみられない。「東牌樓簡牘」は二九字中、全字が一画も横画

から縦画に向けた筆脈がみられる画は皆無であった。「樓蘭文書」は七六字中、三字のみが横画から縦画に向けての筆脈がみられた。次画への筆脈は草書の特徴であり、これが顕著になるものは「十七帖」であり、「東牌樓簡牘」、「樓蘭文書」はこの筆脈は殆どみられなかった。

この研究を進める以前、「東牌樓簡牘」と「樓蘭文書」をみて、「樓蘭文書」は「十七帖」によく類似する結構のものが散見された。しかし、表を作成し比較すると、王羲之による結構の方がより草書に近い結構で書かれていた。王羲之「十七帖」の特質として、

・ 横画の角度が安定している

・ 画の省略が進んでいる

・ 結構に自然な変化がある

ということを挙げることができる。横画の角度が右上がりであり、また角度に殆どばらつきがみられなかった。画の省略に関しては、「東牌樓簡牘」、「樓蘭文書」では「口」部分のなどで「点」を活用し書かれる結構の文字が多くあった。「十七帖」になると、省略ということに重点を置いてか、一画に省略して書かれた文字が多くあった。「東牌樓簡牘」、「樓蘭文書」では省略はせずに「口」部などは「点」を二つ打ち、書かれているが、「十七帖」が肉筆ではないこと、更に後世の感覚が内在している可能性が排除できない。

しかし本研究から、三者の結構に類似点を発見できた。それにより、王羲之が「東牌樓簡牘」、「樓蘭文書」の類いである書を見ていた可能性は否定できない。

王羲之以前の古人の努力があり、更に、王羲之という逸材があつてより結構が整理された。「十七帖」という草書の成果が挙げられたのだと考えられる。

【作品研究 創作】「孟浩然 秋登萬山寄張五」

《釈文》

北山白雲裏 隱者自怡悅 相望試登高 心隨雁飛滅 愁因薄暮起 興是清秋發
時見歸村人 平沙渡頭歇 天邊樹若齊 江畔洲如月 何當載酒來 共醉重陽節

《法量》

三一五・〇×九〇・〇センチ 二紙

《解説》

制作課程で配慮した点について、四点が挙げられる。

- ①作品全体の調和 ②結構 ③筆の扱い方 ④行の流れ
今作は殊に①、②を意識した。

（①作品全体の調和）は、二幅の調和・文字配置における作品効果という点で苦戦した。文字が大きいことにより、隣接する文字や相対する位置にある文字の大小など、初めての経験ばかりで、草稿に時間を費やした。

二つ目が（②結構）である。文字の大小、「点」の位置、線の長短など大作となると、より一面一面に力を注がなければならない。一字でも不自然な結構の文字があると作品全体の印象が変わってしまう。一字における結構の配慮に心がけ、制作を進めた。

以上が今作で配慮した点である。大作に取り組み、頭の中で描いている作品とは程遠く、まだ技術が足りないことに気付かされた制作であった。しかし、制作課程や展示した作品を觀賞し得たものは、これからの制作に向け、大いに勉強となった。今後も書作活動に励んでいきたい。

【作品研究 臨書】「黄庭堅 草書廉頗藺相如伝」

《釈文》

未得 宦者令繆賢日 臣舍人藺相如可使 王問 何以知之 对日 臣嘗有罪
竊計欲亡走燕 臣舍人相如止臣日 君何以知燕王 臣語日 臣嘗従大王与燕王
会境上 燕王私握臣手日 愿結友 以此知之（後略）

《法量》

二四四・〇×五四・〇センチ 四紙

《解説》

「草書廉頗藺相如伝」は、約八十メートルの長巻で、およそ千二百字からなり、黄庭堅の現存作品としては最も長いものである。他の黄庭堅の草書作品と同じように款記がない。しかし、その作者や制作時期については、傳申によって納得できるよう説明されてきた。活気あふれる曲線、円い筆線は、黄庭堅自身が認めているように、懷素・張旭・高閑など、唐代の納書家の狂草書法に依っていることは明らかである。作品の筆力から、この巻物はおそらく紹聖二年（一〇九五）頃に制作されたと推測されている。

黄庭堅の筆法を觀賞することにより、筆を進める速度は遅く、文字に内在する白に意識し書かれていることがわかる。これは作品制作をする上で、私にとって課題としていたことであった。そのためにこの古典を選択した。黄庭堅の書を学び、多く習得したことがあった。その中でもやはり、「文字に内在する白」が作品制作をするにあたって重要であるということである。また新たに今後の課題も見つかった。古典が重んじられる理由を改めて痛感した作品制作であった。

